

テーマ『 新聞を活用した社会を生き抜くために必要な日本語力の育成 』

岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室

副室長 加藤 洋子

1 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室の理念

1990年の入管法改正により、ブラジル人を中心とする日系人が急増する中、岩倉市にも日系人が居住するようになり、外国にルーツをもつ児童生徒の編入が年々増加してきた。当時は、日系人が急増し、各地で社会的な問題が生じている時代であった。近隣の市町では「ブラジル人だから」という理由だけで『日系ブラジル人少年・集団リンチ殺人事件』という凄惨な事件が起きた。外国人に対する差別意識が強まった頃でもある。外国人が多く居住している団地で、文化や習慣の違いによる摩擦が表面化するようになり、未就学、不登校児童生徒の話題も聞かれるようになった。

このような社会情勢の中で、本適応指導教室は、外国にルーツをもつ児童生徒を日本の学校に適応させることが、落ち着いた学校、落ち着いた地域づくりに繋がるという考えで開設された。「未就学、不登校児童を出さない」をスローガンに、「適応指導教室を外国にルーツをもつ児童生徒の『心の居場所』とする」との理念をもって、岩倉市内すべての学校に在籍している外国にルーツをもつ児童生徒に平等な教育体制を保障すべく、「巡回形式」を導入しての指導がスタートした。

『日本語適応指導教室 理念』

- ① 外国にルーツをもつ児童生徒が日本の学校に適応できるように指導する。それが、日本人児童生徒にも好影響を与える。
- ② 市内すべての小中学校に在籍している外国にルーツをもつ児童生徒に平等な教育を行う。日本語を話せばよいではなく、授業についていけるようになるまで指導する。
- ③ 地域でおきている外国人差別・偏見の是正を学校からひろげていく。
- ④ 未就学・不登校児童生徒をつくらない。
- ⑤ 親とコミュニケーションがとれるよう、また、母語・母文化保持のため、ブラジルの教育を取り入れる。

★ 『日本一愛のある適応指導教室』を目指す。『愛』とは、見捨てないこと！

2 新聞を活用する意義

平成13年度に本適応指導教室を開設した頃に比べ、社会情勢は大きく変化している。リーマンショックや東日本大震災、ブラジルの景気悪化、日本国籍を取得しているフィリピンからの児童生徒の編入、在籍する外国にルーツをもつ児童生徒の多国籍化など、その時代の流れを把握しながら指導の形態を変えていく必要がある。保護者の意識としても「デカセギ」から「定住化」に傾向が移っていることを踏まえ、実際の指導に関しては「心の居場所」だけでなく、彼らの学びを保障し、「授業で活躍できる学力」を育てる指導のあり方にウエイトを置いた研究に取り組んでいる。

少子高齢化が進む中、日本に定住するであろう外国にルーツをもつ児童生徒が、自分の将来に夢をもって過ごしていけるようにしていくことが日本語担当教員の使命であると考ええる。

今後、人口減少と少子高齢化の急速な進展が現実のものとなり、新たな経済成長に向け、労働力の確保が不可欠になってくる。

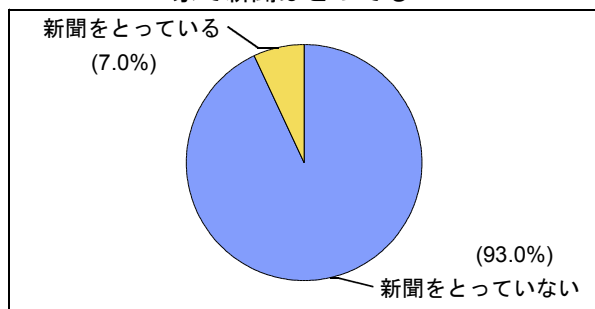
そこで、外国にルーツをもつ児童生徒を単純労働者ではなく、将来の日本を支えるよき一市民として育てていくことが公教育の役割であると考ええる。

外国にルーツをもつ児童生徒が、日本人と同等かそれ以上の社会的地位を得るためには、彼らの強みであるバイリンガルを生かすとともに日本人に匹敵する豊富な語彙力や豊かな表現力を身につける必要がある。日常の会話で得られる語彙や表現は限られており、将来、社会で生きていくのに必要な日本語力を身につけるために、教育活動の中に新聞を取り入れていくことは有意義であり、かつ、新聞は、外国にルーツをもつ児童生徒にとって社会の情勢を知るために貴重な情報源となり得る。

3 外国にルーツをもつ児童生徒の実態

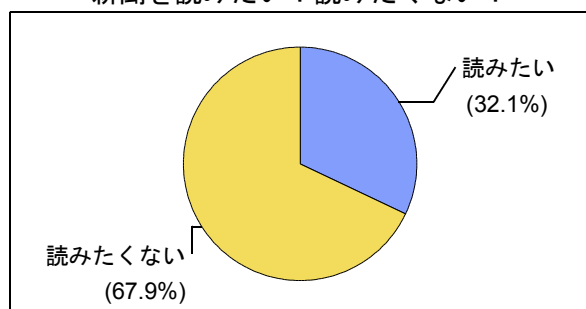
(日本語指導が必要な外国にルーツをもつ児童生徒187名の調査より)

家で新聞はとってる？



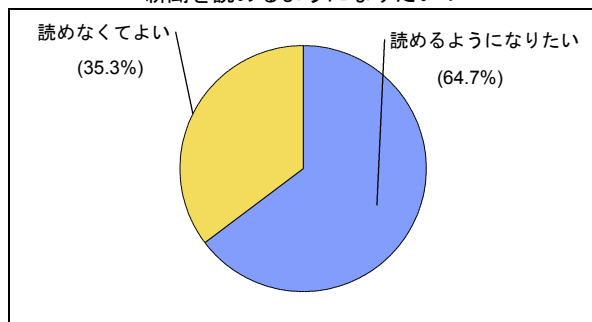
「家で新聞をとっているか」という調査では、93%の家庭が新聞をとっていない、7%の家庭が新聞をとっているという結果であるが、新聞をとっている家庭13軒のうち11軒は両親のどちらかが日本人であり、外国人のみに限ると新聞をとっていない家庭は99%となる。さらに、商売用に購読している中華料理店を営む家庭を除くと100%の家庭が新聞をとっていないことになり、新聞は身近なものではないと言える。

新聞を読みたい？読みたくない？



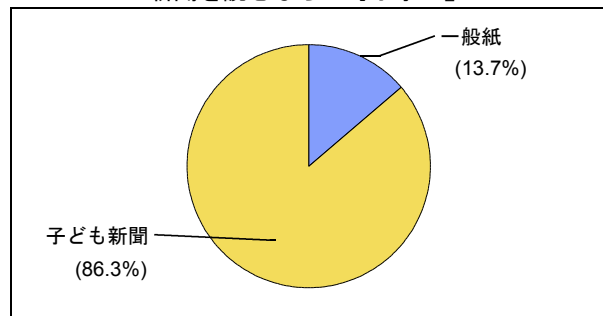
「新聞を読みたいか」という調査では、新聞が身近なものではないとはいえ、32.1%の児童生徒が「読みたい」と答えた。67.9%の「新聞を読みたくない」児童生徒の理由として、「漢字が読めない」「言葉がわからない」「内容に興味が無い」「めんどくさい」「つまらない」などがあげられる。これらのことから、言葉の意味がわかり、漢字も読めるようになれば新聞に興味を示す児童生徒も増えてくると考えられる。

新聞を読めるようになりたい？

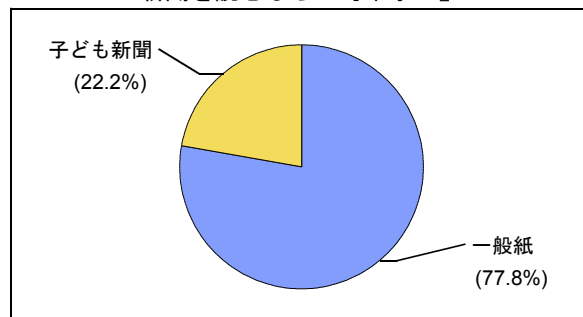


「新聞を読めるようになりたいか」という調査では、64.7%の児童生徒が「読めるようになりたい」と答えている。「読めるようになりたい」理由として、「漢字の勉強になる」「情報が多い」「最新のニュースを知りたい」「世界のことを知りたい」「日本語の練習になる」「読めるとかっこいい」などがあげられた。上記の調査で「読めなくてよい」と答えた児童生徒の中でも53.1%が「読めるようになりたい」と答えている。

新聞を読むなら 『小学生』



新聞を読むなら 『中学生』



「新聞を読むならこども新聞か、一般紙か」という調査では、小学生は「こども新聞」、中学生は「一般紙」を望んでいる。小学生にとっては、一般紙の記事は、内容が難しい上に漢字が読めない、意味がわからないなどの現実的な問題から、より身近でルビがついているこども新聞なら読みたいと答えた児童が多かった。中学生では、語彙力も豊富になり、漢字もある程度、読める現状や学習に役立つ情報量が多い一般紙を選ぶ傾向があった。

4 活動内容

(1) ねらい

外国にルーツをもつ児童生徒が、将来に夢をもてるようにしたい。そのためには、義務教育である小学校や中学校生活を楽しみ過ごし、そして、その先にある高校や大学などの上級学校進学を目指すための豊富な語彙力や豊かな表現力を身につける必要がある。また、上級学校を経て、将来の日本を支えるよき一市民になってほしいという願いをもって指導をすることが大切である。

(2) 新聞を取り入れた指導をする際に留意すべき事項

人と人がコミュニケーションを図るために最も重要な手段として共通の言語があげられる。日本の学校に編入してきた外国にルーツをもつ児童生徒にとって、母語ではない日本語を理解することは難解なことである。そのような児童生徒に対して、少しでも早く日本語を理解し、自分の気持ちを表現できるようにするために下記のような事項に留意して指導を行っていく。

ア ユニバーサルデザイン

本適応指導教室では、ユニバーサルデザインの考えを取り入れている。

言語習得のために有効な視覚に訴える教材をオリジナルで作成し、日常の指導に使用している。また、難しい言葉の意味をやさしい日本語に言い換えたり、ルビふりをしたりして内容を理解できるような配慮を行っている。指導に新聞を活用する際、漢字を読めない児童生徒に対しては、ルビつきのこども向け新聞等を取り入れていく。

イ バイリンガルの育成

近年は、日本生まれや小学校入学以前に来日した外国にルーツをもつ児童生徒が多い。日本の幼稚園や保育園に通っている割合も増えている。そんな中、母語も日本語も話すことはできるが読み書きができない外国にルーツをもつ児童生徒が増えてきている。このようなダブルリミテッドと言われるどちらの言語も十分に習得できないような状態にしないためにも、個々の第一言語を明確にし、家庭では母語を、学校では日本語をという方針で、どちらの言語も読み書きができることを目標としている。指導に新聞を取り入れることで、読み書き等、日本語力の向上にも繋がっていく。

ウ 指導形態 ー岩倉市日本語指導方式ー

平成26年度に「特別の教育課程による日本語指導」が示され、公教育での日本語指導が位置づけられた。岩倉市は、原則、日本語や教科の理解度（以下、ステップ）に応じて取り出しによる日本語指導を行っている。ステップごとに、一人あたり週1～5時間の取り出し指導を行い、1単位時間を4つの指導内容に分けて、現学年の指導とステップに応じた指導を並行して組み合わせるモジュール形式で指導を行っている。外国にルーツをもつ児童生徒の日本語力を向上させるとともに教室で活躍できる力をつけることが日本語指導教室の目標であり、モジュール指導に新聞を活用する時間を設けることは限られてくる。そのため、カリキュラムとの関連を考慮しながら、無理なく新聞を指導に取り入れていく。

エ 先行学習 ーカリキュラムとの関連ー

学校教育の中での日本語指導であり、新聞活用もカリキュラムの範疇を逸脱しないよう、新聞が位置づけられている小学校4年生以上で実施していく。ただし、小学校1年生から3年生までの指導には、こども向け新聞等で興味を示しそうな記事を中心に取り上げ、新聞をより身近なものとして感じられるようにしていく。

(3) 手だて

外国にルーツをもつ児童生徒に対して、有効な新聞活用をしていくために下記の4項目を指導の柱とした。

ア キャリア教育 「将来の仕事 ビジョン」

外国にルーツをもつ児童生徒は、自分の意志で日本にいるわけではなく、「今、何のために日本にいるのか」「何のために勉強するのか」という意識が希薄である。そういう彼らに、「働く人」の新聞記事を通して、将来に夢をもち、今、学ぶ必要性や社会との関わりの大切さを感じさせたい。また、アイデンティティも大切に、彼らの強みであるバイリンガルを生かした仕事などにも興味をもたせたい。

イ 情報収集・発信

学校教育の中での日本語指導であるため、カリキュラムに基づき、岩倉市日本語指導方式による先行学習を通して、教室での学習進度に応じた新聞の活用を心がけたい。自分が知りたい情報を入手する手段として、インターネットは便利であるが、様々な情報が混在し、多種多様な情報を入手できるという新聞の利点を知らせたい。また、日常生活で新聞に触れる機会の少ない外国にルーツをもつ児童生徒がどのような記事に興味を示すのかにも着目したい。

ウ 話す・ディスカッション

外国にルーツをもつ児童生徒が興味を示した新聞記事を活用し、ディスカッションを行うことで、話し合いの仕方を身につけるとともに学びあいに参加できる語彙、表現の向上を目指したい。

エ 新聞に親しむ（語彙・表現）

小学校低学年には、新聞に関連する指導単元がないため、学年および個の日本語力にあわせて新聞を活用し、新聞に触れさせる機会を設けることとした。

5 実践

(1) キャリア教育 「将来の仕事 ビジョン」

① 実践のねらい

『小学校低学年』 いろいろな仕事をさがそう。

職業や内容を知り、興味をもつ。

『小学校高学年』 いろいろな仕事について調べよう。

どうすればなりたいたい職業になれるか、簡単な進路を考える。

『中学生』 将来の仕事にビジョンをもとう。

② 実践例 キャリア教育 『将来の仕事を考えよう』 中学2年生

○ 対象生徒：ステップ2、3

○ 使用教材：中日新聞 ジュニア中日『ハローお仕事』

(警察犬訓練士 2011年10月23日付)

○ 内 容

ジュニア中日『ハローお仕事』の記事の一覧から、二人で1つ記事を選択した。話し合いをして互いに興味のある職種を決め、記事を選択した。まず、新聞の見出しや写真から仕事内容を予想し、本文から仕事内容がわかるところに線を引いた。次に、線を引いたところから仕事の内容をワークシートにまとめた。最後に、この記事を読んだ感想とこの仕事に対する自分の意見を書いた。



○ 取組を終えて

- ・ 新聞を読み取る際に、観点を予め指示し、線を引かせることで、文章をまとめることに役立てた。
- ・ 自分の意見・感想を書くことは、作文の練習に繋がる。間違った文法表現や漢字の誤りを訂正することができた。
- ・ 話し合いをして互いの納得する仕事の記事を選択する過程で、意見を交わし、自分の考えと違う意見を尊重することができた。
- ・ 自分の興味のある仕事以外の記事を読んだため、仕事内容がわからないものについて知り、意見をもつことができた。
- ・ 将来の仕事についてまだ考える機会が少なく、仕事の記事に関心をもつことに至らなかった。様々な業種や仕事内容があることを今後も記事を通して知り、自分の将来の仕事について考える必要がある。

(2) 情報収集・発信

① 実践のねらい

『小学校低学年』

『小学校高学年』

『中学生』

興味のある写真や絵を選び感想を書こう。

様々な情報が混在していることも新聞を読もう。

記事を読みタイトルを考えたり、内容をまとめたりする。

興味のある記事を見つけ、調べ学習を行う。

様々な情報が混在している一般紙を読もう。

グラフや写真などの情報から、記事の内容を推測する。

見出しから記事を選び、レベルに応じて内容を読み取る。

記事の内容を国語や社会などの教科の学習と関連づける。

② 実践例 情報収集・発信

『記事を読んで、ユニバーサルデザインについて考えてみよう』 小学5年生

○ 対象児童：ステップ2・3

○ 使用教材：中日こどもウィークリー

(ユニバーサルデザイン 2017年 1月28日付)

○ 内 容

4年の社会科で子どもたちはユニバーサルデザインについて学んだ。知識や興味はもっていたので、この記事を読み、身近にあるユニバーサルデザインについて考え、見たことのあるデザインや自分が考えたデザインを発表した。

○ 取組を終えて

- ・ 4年の社会科の授業を思い出しながら取り組むことができた。
- ・ 身近にあるユニバーサルデザインの良い点を発表することができた。
- ・ お年寄りや障害をもった人のことを考えながらだれでも利用することができるオリジナルのユニバーサルデザインを考えた。



(3) 話す・ディスカッション

① 実践のねらい

- 『小学校低学年』 自分の考えを伝えよう。
話型を使って、自分の言葉で簡単に伝える。
理由をつけて相手にわかりやすく伝える。
- 『小学校高学年』 仲間と話し合い、自分の考えを深めよう。
自分と仲間の考えを比べ、お互いの考えを整理し、深める。
- 『中学生』 他者の意見を聞き、自分の考えをもとう。
互いの考えを伝え合う。
新聞記事を活用したディスカッションを行う。

② 実践例

「実践例1」 話す・ディスカッション 『話し合って考えを広げよう』 中学2年生

○ 対象生徒：ステップ2

○ 使用教材：中日新聞

(「規制不十分」会社に手紙 2016年11月15日付)

○ 内 容

記事を音読し、その後語彙の確認をしながら内容を理解した。次に、内容に対する意見を口頭で発表し、最後にワークシートにまとめた。

(生徒の意見・感想)

ポケモンGOが問題になっていることは知っていたが、僕はゲームが嫌いなのでこの問題に興味がなかった。しかし、この記事を読んで、ルールを守っている人がゲームのためにルールを守らない人の犠牲になるくらいだったら、ゲームをなくした方がいいと思った。

○ 取組を終えて

在籍学級において、話し合いをするための「テーマを理解し、それに対する自分の考えを言葉にする」という最初の目標を、新聞を使って練習することができた。この学習を学級での話し合いに生かしていけるように支援していく。



「実践例2」 話す・ディスカッション 『表現を選ぶ』 小学6年生

○ 対象児童：ステップ3

○ 使用教材：中日こどもウィークリー (男女平等 2016年12月17日付)

○ 内 容

国語の12月の指導単元『表現を選ぶ』において、伝える方法による表現のちがいについて、書き言葉の例として新聞の記事を活用した。

○ 取組を終えて

- 教科書に書かれている内容だけでなく、新聞の記事を使ったことで、書き言葉の表現の特徴や気をつけなければいけないことを理解させることができた。
- 語順や構成などは、児童の日本語力では理解できないため、新聞の記事の内容を映し出し、1つ1つ確認した。

(児童のまとめ・感想)

- 話し言葉は、音声で自分の気持ちをつたえることができるし、言い間違いをすぐに直せるからいいと思いました。それに対して、書き言葉は、文字が残るので間違えないようにしなければなりません。どの人でも、意味がわかるように共通語が使われています。それから、文の内容がわかるように、語順や構成が整っているということが新聞を読んでわかりました。



(4) 新聞に親しむ（語彙・表現）

① 実践のねらい

『小学校低学年』 新聞を身近に感じよう。

記事からひらがなやカナカナ、既習漢字に○をつける。

好きな写真や絵を選び、「はじめ、中、おわり」の文を作る。

スクラップブックを作り、新聞に興味をもたせる。

『小学校高学年』 新聞を活用しよう

『中学生』 記事の中から、指定した部首のつく漢字を書き出す。

今まで習った漢字を抜き出し、部首別に分類する。

② 実践例

「実践例1」 新聞に親しむ 『へんとつくり』 小学3年生

○ 対象児童：ステップ2

○ 使用教材：中日こどもウィークリー（2016年10月22日付）

○ 内 容

漢字の「へん」と「つくり」を知り、「きへん」や「にんべん」、「さんずい」などのへんを使った漢字を教科書から調べる。その後、こども新聞の記事から、自分の知っているへんやつくりが使われている漢字を抜き出して、ワークシートにまとめる。

○ 取組を終えて（児童の感想より）

- ・ 漢字がたくさんあるへんもあれば、少ししかないへんがあることがわかった。
- ・ へんとつくりに分けられない漢字もあった。



「実践例2」 新聞に親しむ 『記事の中からカタカナを探そう』 小学2年生

○ 対象児童：ステップ3

○ 使用教材：中日こどもウィークリー（乳児用液体ミルク 2016年10月22日付）

○ 内 容

記事を一文ずつ理解しながら読む。わからない言葉は簡単な日本語で教師が伝える。記事の中から、カタカナの言葉に丸をつけ、ワークシートに知っている言葉と知らない言葉に分ける。その後、ワークシートに感想を書く。

はなしをきいてかんそうをかこう。

もし日本にきこらたかくてもかう。

わたしはたすかるね。

地しんはきこはくはないけど

知らないことは「メリット」

知っていることは「ミルク」「パック」「ルール」

■ 乳児用液体ミルク

液体のままパック詰めされた赤ちゃん用ミルク。日本では定まったルールがないため売られていませんが、国は販売ができるよう議論を始めました。お湯で溶かす粉ミルクと違い、ふたを開ければそのまま飲めるのがメリット。災害などでお湯が沸かせない時にも役立ちます。外出の際に便利のため、海外では広がっています＝写真。菌がつかない処理がしてあり、冷蔵庫に入れなくても半年から1年ほどは保存できるようになっています。



しんぶんをよんでみよう

なまえ

しんぶんのきじのなかからカタカナをさがしてみよう。

6 まとめ

二年間にわたる新聞を取り入れたモジュール指導を通じて、外国にルーツをもつ児童生徒がどのように変容し、どのような成果や課題があったかを振り返ってみたい。

本実践を行うにあたって実施した、「新聞を読みたいか」という調査で、「新聞を読みたい」と答えた児童生徒が32.1%、「新聞を読みたくない」と答えた児童生徒が67.9%であったが、継続して新聞を活用した実践を行った結果、「新聞を読みたい」と答えた児童生徒が63.2%、「新聞を読みたくない」と答えた児童生徒が36.8%となり、「新聞に親しませる」という目的には近づいたと言える。外国人の家庭でも、一軒ではあるが、「こども新聞」を購読するようになった。

4つの柱として、「キャリア教育」、「情報収集・発信」、「話す・ディスカッション」、「新聞に親しむ」を掲げ、学年に応じた内容で学習に結びつく活用の仕方に配慮してきた結果、下記のような成果が得られた。

- ・ 様々な職業があることを知り、自分がなりたい仕事をするためには、どのような勉強をしなければならないか、そこを目指して頑張るという目標をもった。
- ・ 漢字の読みを覚えたり、多様な表現にふれたりして、日本語力向上に結びついた。
- ・ 表題やタイトルの構成等、教科書で学習する内容が定着した。
- ・ インターネットに比べて、情報がまとまっていて、個々の興味に関わらず、ランダムかつ最新の情報が載っているため、興味の幅が広がり、今まで知らなかった知識を深めることができた。また、多くの情報の中から必要な情報を読みとる力をつける機会となった。
- ・ 視覚的な補助となる写真、グラフ等が掲載されている記事は、内容理解を助ける要因の一つであった。
- ・ 興味を示した記事から自分の意見をもち、お互いの意見交換を通じて、話し合いや発表の仕方を学ぶことができた。
- ・ いつでも手にとって読むことができるような環境を整備し、日常の学習に活用していくことで、新聞に親しみをもち、身近に感じる児童が増えた。
- ・ 外国人児童にとって新聞は、習字等で使うものであり、読むものではなかったが、イメージが変わった。

ただ、新聞を外国にルーツをもつ児童生徒に対するモジュール指導に取り入れていく際にいくつかの問題点があった。問題点の一つとして、新聞は発刊されてからしか内容がわからないため、年間を見通した日本語指導カリキュラムへの位置づけができない。

そのため、カリキュラムへどのように位置づけていったら効果的な活用ができるかを考えていかなければならない。

また、記事を意図的に選別しないと学習につなげることが難しい、情報が多すぎて内容を理解することができない、ルビはふってあるが、簡単な日本語の表現にはなっていない等、日本語教育の教材としては適切とは言えない点がいくつかある。

日本語力にハンディを抱えている外国にルーツをもつ児童生徒に対して新聞を活用していくためには、学習のねらいを明確にし、適切かつ的確な材料を選別し、焦点化していく指導者の力量が求められる。

本実践で、日本語指導カリキュラムの中に新聞を取り入れ、活用してきた結果、多様な語彙、豊かな表現、多様な情報の収集、有益な情報の選別等、外国にルーツをもつ児童生徒の日本語力を多面的に向上していくための手だてとして、意義があったと感じている。

『夢をもち、将来の日本を支える外国人児童生徒の育成』が、岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室のテーマである。外国にルーツをもつ児童生徒が抱く夢の実現を支援していくためには、これからも継続して、社会を生き抜くために必要な日本語力を育成していかなければならない。